うるくの歴史と文化を語る会
会報 ガジャンビラ
第29号

発　行：うるくの歴史と文化を語る会
発行人：長嶺弘善　編集人：長嶺文雄
〒901-0156
那覇市田原4-1-1　JAおきなわ小禄支店内
TEL. (098) 857-1175　FAX. (098) 852-1486

代表就任あいさつ
――自分史・自分事に関連する歴史文化を――

長嶺　弘善
うるくの歴史と文化を語る会　代表

新型コロナウイルス感染症は発生当初は人々の生命健康への脅威となり、また社会的な諸団体組織の活動への脅威ともなった。うるくの歴史と文化を語る会の活動も、「うるくま～い」や総会やらが中止や延期に追い込まれてきた。しかし、ここ最近感染現象も落ち着き、社会的活動も再開されてきている。

2014年（平成26年）から歴文会代表を務めてきた赤嶺健治氏が退任することになり、2022年（令和4年）10月27日の第20回定期総会で役員改選が行われた。私の代表就任が承認されたので、微力ではあるが会の発展に尽くしたい。

歴文会は2002年（平成14年）5月に設立され、私はそのときから一会員として会活動に参加してきた。ただし、小禄（うるく）の歴史と文化に興味はあるが、専門的に勉強してきた訳ではない。大学で法律系科目を勉強してきて、延長上で大学非常勤の教職に就いてきた。しかし、総会での議論交流や、「うるくま～い」での地域巡り、また発行される会報『ガジャンビラ』を読み、興味の赴くままに書籍をひもといたりするうちに、歴史文化への思考が少しずつ深まってきた。そして、まずは自分の生い立ち、父母・祖父母のこと、更に何代も前の先祖のことを調べて記録する事から始めた。そこでは十分に沖縄史＝琉球史に連動する内容を確認する事ができた。また、属する門中には、幸いにも先達が残した由来記があり、他の門中との交流、あるいは他の門中や字（部落）に残された記録による歴史的裏付けのある由来を確認する事ができた。私の調査成果物＝論考の初掲載は、歴文会発足10年経過後の『ガジャンビラ14号』（2013年9月）である。

自分史（自分誌）は、世代・世紀の時間軸を遡って、〈時代の様々な事象・出来事〉＝歴史を調査記録することである。それは同時に、地理的空間・場所を水平移動して、他人との関連事項、すなわち〈社会生活の共通の行動様式〉＝文化を記録することでもある。自分と他人との関係、他人の事柄をいわゆる他人事（たにんごと、ひとごと）ではなく、自分事（じぶんごと）として関係づけて記録することが重要と考える。その成果を再度人々に提示して関係を深めていくことができる。NHKテレビ「ファミリーヒストリー」は、なかなか面白い番組である。

歴文会名称の“うるく”は、1954年9月那覇市との合併前＝旧小禄村を念頭に置いている。しかし何も小禄地域に限定しなくとも良い。那覇（なーふぁ）であれ、首里（しゅい）・真和志（まあじ）であれ、また佐敷（さしち）・今帰仁（なちじん）の歴史文化であっても、小禄に関連するのであれば、会の趣旨に十分応えることができる。

会員には、改めて自己の周辺から小禄を見つめ直して調査記録に取り組んで貰い、成果物の『ガジャンビラ』掲載をお願いしたい。また、会員ではないが『ガジャンビラ』を目にして一読した方には、是非、歴文会への参加をお願いし、そして将来的には自らの調査成果物の『ガジャンビラ』掲載をお願いするものである。

《語り》合いましょう。

第20回定期総会：221027会場様子

第20回定期総会：代表交代

宮城平田原古墓群：230125現地説明会

赤　嶺　健　治
うるくの歴史と文化
を語る会　顧問

誇れる小禄（うるく）の歴史と文化を語り継ごう

はじめに、2002 年 5 月 9 日に創立した本会が、年々活動を続けて、めでたく 20 周年を迎えたことを、会員の皆様と共に慶祝したいと思います。また同時に、これまで本会を支え、協力して下さった多くの個人や団体の皆様に、心よりの謝意と敬意を表します。

今回の講演の機会をいただいて、大変光栄に存じます。本日は、私がウチナーンチュ（沖縄人）としての自己認識から、ウルクンチュ（小禄人）としての帰属意識を持つようになった過程をたどり、郷土愛と同胞愛に目覚め、そして誇れる歴史と文化の恩恵にあずかる幸せを日々実感していることについてお話ししたいと思います。

1　ウチナーンチュとしてのアイデンティティ（自己認識、帰属意識）と誇り

最初に、私たちのウチナーンチュとしてのアイデンティティ、つまり自己認識や帰属意識と誇りについて考えたいと思います。私は 1938 年に、旧小禄村字具志出身の父親と首里市大中町出身の母親の長男として大阪市此花区で生まれ、終戦後の 1946 年 9 月、小学校 3 年の 2 学期まで大阪市に住んでいました。当時、本土では沖縄人に対する偏見と差別の風潮があったため、私の両親は、**自分たちが**沖縄出身者であることを隠し、出身地を聞かれると「九州です」と答えていました。**1946 年 9 月に**沖縄へ引き揚げてきて、初めて私は自分がウチナーンチュであることを認識しました。自分の出自が沖縄であることの自己認識や帰属意識は、成長とともに強まり、今では、それを誇れる時代と環境になったことを大変幸せと感じています。

話はアメリカに飛びますが、2000 年に実施されたアメリカ国勢調査の先祖調べへの回答で、1,103,000 人が「私は日系です」と申告したのに対し、18,000 人が「私は沖縄系です」と申告しています。沖縄系の人々が、自分を「日系」と申告せずに、あえて別項目の「沖縄系」を名乗っていることは、多くの人がウチナーンチュであることに誇りをもっていることを示しています（アメリカ国勢調査局 US Bureau of Census HP 参照）。

沖縄県内では、2022 年 8 月 18 日の『沖縄タイムス』に、次のような記事が掲載されていました。

> 民間シンクタンク「ブランド総合研究所」は 17 日、全国 47 都道府県の住民を対象にした「住民による都道府県・魅力度ランキング」の調査結果を発表し、沖縄県が 1 位になった。…「お住いの都道府県を魅力的だと思いますか」という質問に対して、回答した沖縄県民の約 9 割が「とても魅力的」「やや魅力的」と回答した。

この記事から、大部分のウチナーンチュが、自県に自信と誇りを持っていることが分かります。

折しも、2022 年 10 月 31 日から 11 月 3 日までの 4 日間、第 7 回世界のウチナーンチュ大会が開催され、ハワイやアメリカ本土、ブラジルなど世界の 20 の国と地域からおよそ 2,400 人が参加し、強い絆で結ばれていることを確認し合いました。県全体の行事のほか，市町村レベルの懇親会も開催され、小禄地区では世界のウルクンチュ・タバルンチュ大会が催されました。

以上の事から、沖縄県民や沖縄県系人が自分のルーツに誇りを持っていて、ウチナーンチュネットワークの強い絆で結ばれていることが分かり、喜ばしく思います。このような郷土愛は、出身地の歴史と文化を誇る気持ちと同胞愛がその根底にあることに違いありません。

2 私が小禄の歴史と文化に関心を持つに至るきっかけとなった三つのこと

戦後、私たち家族の大阪からの引き揚げは、名古屋収容所を経て、米軍のLST(戦車揚陸艦)に乗せられて、中城村の久場崎桟橋に上陸という形でした。久場崎収容所から、小禄村高良の津真田に移動し、テント張りの規格住宅で、しばらく生活したあと、帰還が許された具志のトタン葺き住宅に落ち着きました。私のウルクンチュとしてのアイデンティティが芽生えたのはそれからです。その意識が強くなった要因として次の三つのことが挙げられます。

一つ目は、子供のころからよく耳にしていた歌ですが、そのうち、それが「三村節」という歌で、歌詞の意味は「三村の娘たちが、揃って布織話をしながら、縞糸の数を間違えないでよー、間違えたら元がとれないよー」ということだと分かりました。「三村節」の歌詞は次のとおりです。［小禄豊見城　垣花　三村/三村のアン小達が　揃とうてぃ　布織い話/あやまみぐなよー　元かんじゅんどー］。冒頭の小禄(うるく)という名前が耳ざわりが良く、強く印象に残って、自分たちの地域のことを歌った歌だと認識し、興味が湧いたのを覚えています。それとの関連で、小禄では 1920 年代まで小禄絣(うるくクンジ―)の生産が盛んで、地区の名産として有名だったことを知りました。

二つ目は、大宜見小太郎らウチナー芝居シーの方々が語った字小禄(いわゆるうるく同村(どぅーむら))の「うるくくとぅば」の魅力が強烈だったことです。小太郎の「うるくくとぅば」は独特の抑揚に誇張はあったものの、大変興味をそそるものでした。終戦後しばらくは、那覇への行き帰りに小禄集落内を歩いて通った時などに、成人の方々の「うるくくとぅば」の会話が耳に入ってくる時があったものの、殆ど芝居か親子ラジオでしか聞くことができなくなっていました。「うるこーニッポンがやーすー？」の冗談もよく聞こえるようになり、会合などで自己紹介の折に出身地が小禄と言うと、すかさず「ああ、ニッポンの方ね」と言われました。

なお、本会幹事の高良広輝さんが運営する『超ローカル「小禄―OROKU―うるく」ホームページ』に、高良正一さん(那覇市平和通り商店街振興組合副理事長)の貴重な「うるくくとぅば」の音声があります。

三つ目は、ハワイ研修中に見聞したハワイ在住「小禄系住民」の活躍ぶりが挙げられます。私は1968 年 6 月から 12 月まで、米国民政府の実務研修制度により、6か月間、ハワイの東西文化センターに滞在し、米国中小企業庁のハワイ支局で研修を行いました。ハワイ滞在中、小禄にルーツを持つ方々がめざましい勢いでスーパーやレストラン経営で成功を収めていることを見聞し、小禄出身者として大きな誇りを感じました。

以上の三例は、私がウルクンチュとしての自覚と誇りを強める要素となり、今日まで、うるくの歴史と文化に関心を寄せ、それらを研究し記録するモチベーション(動機と意欲)を与えてくれています。

3 小禄地区のめざましい発展(人口増加)

下の表は那覇市の本庁と各支所の管轄地区における人口増加を示したものです

	1950年 12月1日現在(A)	2022年 7月31日現在(B)	(B)/(A)
那覇市（本庁）	44,790人	99,491人	2.2倍
首　里（支所）	20,942人	56,145人	2.7倍
真和志（支所）	31,627人	103,343人	3.3倍
小　禄（支所）	12,924人	58,427人	4.5倍
	110,283人	317,406人	2.9倍

参照：『那覇市史別巻』2008年3月、　那覇市公式WebサイトHP

小禄地区の起源である小禄間切は、1673 年に、真和志間切から「小禄、儀間、金城」の 3 カ村、豊見城間切から「大嶺、赤嶺、安次嶺、当間、具志、高良、翠宮城、宇栄原」の 8 カ村、計11カ村で成立し、その後まもなく「湖城、松川、田原、堀川」の4カ村を新設して「15 カ村」となりました。その後、村や字の構成に一部の変化はありましたが、誕生からおよそ 350 年になります。

上記人口統計によりますと、1950 年 12 月 1 日から 72 年後の 2022 月 7 月 31 日までに、那覇市本庁及び首里と真和志地区の人口は 2.2 倍から 3.3 倍までの伸びであるのに対し、小禄地区の人口は 4.5 倍も伸びていることが分かります。これはその間の小禄地区の発展を反映し、今後の繁栄を期待させる事実と見ることができます。

小禄地区人口の住所別統計で人口の多い順を見ると、1 位は小禄の 17,641 人、2 位が宇栄原の 12,781 人、3 位が田原の 5,951 人で、以下具志 5,667 人、金城 5,218 人、赤嶺 3,041 人、高良 2,964 人、鏡原 2,338 人、宮城 1,364 人、当間 1,124 人、安次嶺 338 人となっています。小禄地区の人口には、もちろん小禄地区以外の出身者も含まれていますが、「三代江戸に住めば江戸っ子」と言われるように、三代目からは立派なウルクンチュです。

1951 年に小禄運輸が創立され、同社のマークのついたトラックがあちこちで見られるようになり、感動したのを覚えています。一般に「禄運」の愛称で呼ばれていた同社は、民間の貨物運送の他に、在沖米軍との契約による物資輸送や全県の学校給食の配送も担うなど、目覚ましい発展を遂げ、最近では「おろくバス」として観光バスも運行しています。

1953 年に、旧居住地が軍用地として接収された大嶺、鏡水、安次嶺、當間、金城など5か字民により新部落建設期成会が組織され広大な新集落が完成したことや、1954 年の那覇市との合併に伴う人口と住宅需要の増加に対応するために 1957 年に漫湖埋立が開始され、1960 年に鏡原町が誕生した事や、1965 年に始まった大規模な宇栄原市営住宅団地などの建設などが発展を導いたものと考えられます。また 1982 年に返還された軍用地跡に出来た小禄金城地区へは県内初の郊外型大型商業店舗（現在のイオン）の進出、モノレール小禄駅、赤嶺駅と連携した特色あるまちづくりが進められました。特に 1989 年の小禄バイパスの開通や拡張整備された那覇空港に隣接する地域に位置するという良好な立地条件などが拡大発展に大きく貢献しています。これまでのめざましい発展と将来への明るい展望は私たちウルクンチュの大きな期待と誇りです。

（この項：那覇市『那覇市都市計画マスタープラン』2020 年 3 月、および小禄村誌発行委員会『小禄村誌』1992 年 8 月参照）

4 私が続けている小禄の歴史と文化を記録する作業

以上述べたとおり、私たちの小禄には誇るべき歴史と文化があります。このことに関する経験と知識は、私たちの生活を豊かにしています。私たちは、故郷の先祖と先輩の皆様への感謝の気持を忘れていません。

小禄の歴史と文化に誇りを抱き、その価値を語り継ぐため、私は次のような記録保存の作業を行っています。

① 各種の参考文献により、小禄の歴史と文化に関係する事項を網羅した琉球・沖縄歴史年表を作成しており、87 頁に達しています。これには教育史も付記しています。

② 購読している『沖縄タイムス』の紙面から小禄に関係する記事を切り抜いて、『小禄人記録』として保存しています。現在7冊になっています。多くの小禄出身者が、教育界、政財界、医療福祉関係、実業界で活躍なさっていることは、私たちの誇りです。

③ 『沖縄タイムス』掲載の告別式の切り抜きを保存し、現在 10 冊になっています。この作業は筆者が琉球開発金融公社、そして後身の沖縄振興開発金融公庫在職中に職務遂行上の必要性から始めたものです。つまり、告別式の広告から、人と人とのつながりを把握し、債

務者の経営手腕や、返済能力、連帯保証人としての資格などの判断材料として利用できたからです。現在では、ウルクンチュの人脈に関する情報を得るのが目的です。

そのほか、沖縄に関する重要な記事は、『沖縄研究資料』として保存し、168 冊になっています。

5 今後の課題

次の四つの分野での研究調査の深化が私たちの課題であると考えています。

① **第一に、戦前、戦中、終戦直後生まれの人々のライフヒストリー（生活史）、オーラルヒストリー（口述歴史）を聞き書きすること。**（本会代表の長嶺弘善さんが 90 歳以上の方々の戦争体験の聞き取りの必要性を指摘しています。）（生活史の実例として『沖縄タイムス』連載の「沖縄の生活史」が挙げられます。第1部が 2022 年 1 月 1 日から 5 月 14 日まで 24 話、第Ⅱ部が同年 5 月 18 日から 10 月 20 日までに 120 話、計 85 人分が終了しました。2023 年 5 月に、新聞紙上に掲載された 85 人分に、掲載されなかった 15 人分を加えた 100 人分が、単行本『沖縄の生活史』として沖縄タイムス社から出版されました。）

② **第二に、うるくくとぅばを収録し保存すること。**（本会編集委員の平良徹也さんが その必要性を指摘しています。）いわゆる「うるくどぅーむら」（小禄同村）の言葉以外にも、各字の言葉には興味深い相違や特徴があります。中学生の頃に「具志アンソー」や「大嶺アキヤー」など各字の方言の特徴を笑い種にしてけんかした記憶があります。

③ 第三に、「うるくまーい」で訪れた名所旧跡およびその他史跡の記録を保存すること。
本会は、2020 年 2 月までに、15 回の「うるくまーい」を実施していて、現地調査と文献調査により、集積した資料はかなりの量に上っており、貴重です。

④ 第四に、小禄の人的資源や小禄出身者の人脈を調べ「人国記」を作成すること。
県内外（小禄地域、県内各地、本土各地、世界各地）で活躍する小禄地域出身者は多数にのぼると思います。このことについて、本格的に調査研究しウルクンチュネットワークを強化拡充するのはきわめて有意義な作業と考えます。

なお、前記の高良広輝さん運営の『超ローカル「小禄―OROKU―うるく」ホームページ』と大鏡建設株式会社が運営する「うるくローカルプレス」の Web サイトは小禄の歴史と文化の紹介に大きく貢献していると思います。

以上、「誇れる小禄の歴史と文化を語り継ごう」というテーマで所見を述べさせていただきました。本年 86 歳になった私は、ウルクンチュであるという自覚をますます強く感じる今日この頃です。ウルクンチュとしての誇りは、ウチナーンチュとして、ひいては日本人としての誇りと喜びへと発展していきます。これからも、会員の皆様とともに、小禄の歴史と文化に誇りを持ち、語り継ぎ、次世代に伝承していく責任を果たして行きたいと思います。

最後に、本会と会員の皆様のますますの発展を祈念し、同時にこれまで代表を務めさせていただいた私へのご支援とご協力に感謝して、本稿の締めくくりといたします。ありがとうございました。

付記 1：小禄の歴史と文化について、本会発行の『会報ガジャンビラ』（2002 年 7 月 1 日創刊号～2022 年 7 月 30 日第 28 号）は貴重な文献です。会員への配布のほか、沖縄県立図書館、那覇市の中央図書館と小禄南図書館、琉球大学附属図書館に寄贈されています。

付記2：本稿は、2022 年 10 月 27 日に開催された本会の第 20 回定期総会で、記念講演として述べたものに、言葉を加えて詳述したものです。

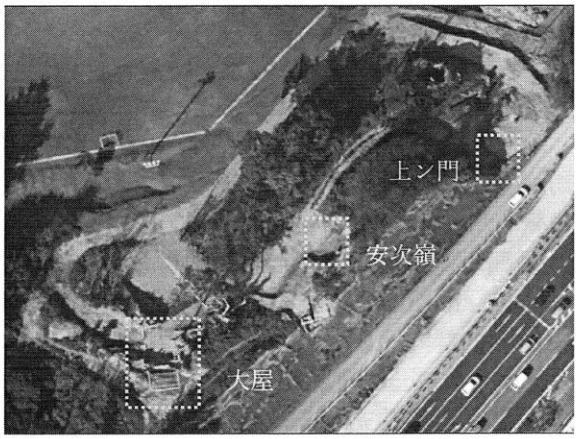
山　道　　崚
那覇市市民文化部文化財課
埋蔵文化財グループ

「宮城平田原古墓群」の発掘調査成果

沖縄総合事務局は、那覇空港から沖縄自動車道、南風原道路、豊見城東道路と一体となって本島中南部から北部の高速性を確保し、交通混雑を緩和するため、一般国道506号「小禄道路」敷設工事を進めている。

那覇市は、沖縄総合事務局南部国道事務所と協議し、道路計画範囲内に所在する遺跡の現地保存を協議した。どうしても工事範囲を変更できず現地保存ができない遺跡について、南部国道事務所が費用を負担し記録保存の発掘調査を実施することとなった。

「宮城平田原古墓群」は、そのような中で発掘調査を実施したところ、大屋門中墓は残存状況が極めて良好且つ沖縄諸島でも他に類例を確認されていない形態の墓室構造と出土遺物が確認されたため、再度現地保存の協議を依頼した。その結果、墓の屋根一部は工事の影響を免れないものの、大屋門中墓をほぼ現状保存することが可能となった。同時に発掘した他の門中墓は、再度の協議を経ても工事計画から外すことができなかったため、残念ながら工事が進んだ現在では、その姿を確認することができなくなった。本稿は、令和7年度に刊行を予定している小禄道路敷設に伴う発掘調査報告書のうち、「宮城平田原古墓群」の概要報告となる。



本稿は①いつ築造したか。②どのような墓室構造か。③中から何が出土したかを整理し、最後に「宮城平田原古墓群」とはどのような遺跡であるかまとめる。

①いつ築造したか

まず、墓が作られた当時の状況を把握する。『宮城誌』（那覇市字宮城自治会2006）に、宮城の集落発祥からの歴史がよく整理されており、集落の発祥に関する伝承や歴史史料の記述を以下の点にまとめた。

1．豊見城間切　翠宮城（順治16（1659）年）
　豊見城間切翠宮城地頭名の記録あり。それ以前を推測できる記録無し。
2．小禄間切　　翠宮城（寛文12（1672）年）
　豊見城間切から分離。小禄間切ができた時の字名。
3．翠宮城の御嶽は、『琉球国由来記』（1713年）に記載なし
　その時点でまだ御嶽はできていなかった可能性がある。
　宮城の御嶽は大屋の上原家が司祭する。

この3点から宮城の集落は1600年代の後半には成立し、同じ時期にお墓が築造されたと推測できる。

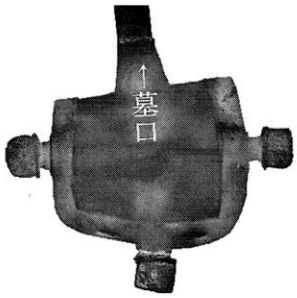
今回の発掘調査では、大屋門中墓、安次嶺門中墓の調査からこの推測を裏付ける調査成果が得られた。その他の門中墓があったと推定される場所も掘削したが墓室などを確認できず、上ン門門中墓は墓庭の一角が僅かに残るのみであった。

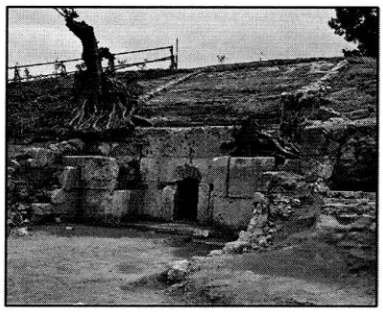
②どのような墓室構造か

１．大屋門中墓について

大屋門中はいつ頃宮城に住み始めたのか記録は無いが、門中の元祖大屋が宮城の国元、嶽元である。

屋敷が集落中心部の御嶽に隣接しており、祭祀を執り行っていたことから、集落の成立期から中心的な役割を担ってきた門中であることがうかがえる。





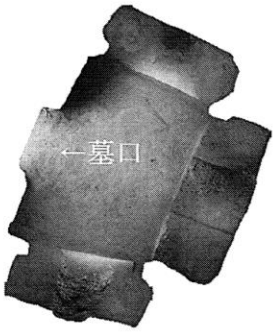
大屋門中墓の墓室構造と外観写真

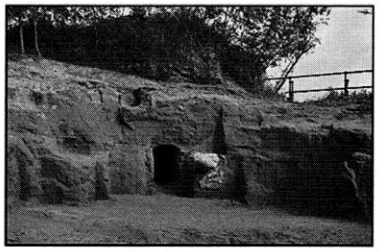
墓室構造について、沖縄本島中南部の古墓を発掘した成果から書かれた論文「近世墓の形態～本島中南部における墓室構造の変遷について～」（仁王浩司2013）を参照し、大屋門中墓は「平坦コの字状棚」に分類した。墓の年代は、内部の厨子甕に墨書された年代から、その墓室構造が使用された期間を推測できる。「平坦コの字状棚」は1630年頃に出現し、1930年頃まで使用とされている。墓室内が満杯になった際、古い厨子甕から遺骨を取り出し、壁に「池」という堀込を造ってその中に古い遺骨を移す。これまで発掘された古墓は、墓室が満杯になると「池」を1か所造り、さらに満杯になるころには墓の使用を終了しているようであるが、大屋門中墓は「池」を3か所も造られている。那覇市内では類例が無く、沖縄諸島各地でも管見の限り確認されていない大変希少な事例であることが明らかとなった。

２．安次嶺門中墓について

安次嶺門中は、いつ頃宮城に住み始めたか、その元祖についても明らかではない。

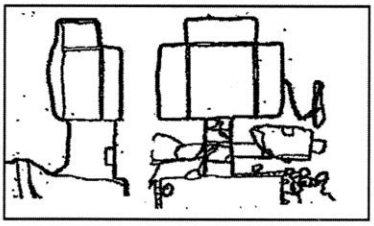
墓室構造について、上記論文を参照し、「出窓状棚」に分類した。厳密に言えば「出窓状変形棚」へ墓室を改築しようとして中止した印象を受けた。「出窓状棚」は1630年代頃に出現し、1780年代頃まで使用とされる。

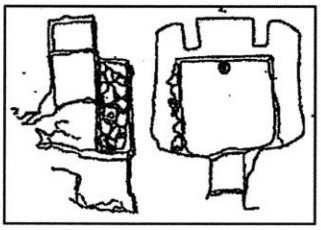


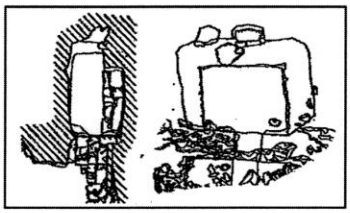


安次嶺門中墓の墓室構造と外観写真

安次嶺門中墓だけは、戦火を逃れて現存している『宮城地籍図』（明治36年作成）に記載されている墓の土地区画と一致しない。地籍図に記載されている区画は、過去の斜面地崩落防止工事によって削られているが、周辺から厨子甕の破片を採集することができた。推測の域を出ないが、1700年代の後半頃にこの墓の使用を終えて、新しい墓を造り直したと思われる。壁に「池」を追加しようとした窪みや、棚を拡張して「出窓状変形棚」にしようとした痕跡が見られることから、当初は厨子甕で満杯になった墓室の拡張に取り掛かり、途中で新しく大きな墓を新造することに計画変更され、拡張作業を停止したのではないかと考える。







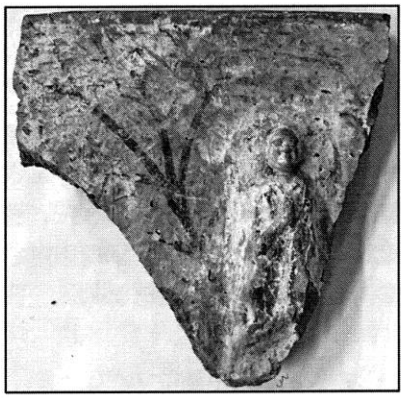
左：出窓状棚　　中央：出窓状変形棚　　右：平坦コの字状棚　(仁王2013より抜粋)

③中から何が出土したか

墓であるからには当然だが、厨子甕が出土している。ただし、安次嶺門中墓の内部は厨子甕の破片1つさえ落ちておらず、前述の新しく作ったのであろう墓があったと思われる区画周辺で拾えたのみである。通常は墓の外で採取した遺物も、その墓に係る遺物として報告書に記載するが、本稿では紙幅の都合上、墓内部から出た遺物、つまり大屋門中墓の出土遺物の報告のみに割愛する。

まず、前述②で述べたように墓室構造は1630年頃には出現することから、当該時期の厨子甕も納められていたことが想定できる。実際に発掘して出土した遺物は、破片そのものに年代の墨書は見られないが、その形状や装飾から1750年頃の厨子甕(壺屋焼物博物館所蔵資料)と類似する破片が確認された。墓室構造の出現と厨子甕の年代に開きがあるものの、あくまで墓室構造は“出現”である。大屋門中墓から出土した厨子甕にさらに古いものは確認されなかったことから、大屋門中墓は1700年代に造られた可能性がある。

厨子甕は全て破片で出土した。戦後に新築された現在使用されている門中墓へ遺骨を移す作業の際、頭蓋骨など大きな部位の骨を現在の墓に持っていき、指など細かい遺骨は墓室内に残したままのようであった。門中代表の上原氏によれば、今も墓室内に遺骨をまとめて入れた蔵骨器と頭蓋骨が納められているとのことである。墓の移転に伴って、空になった古い厨子甕を割った破片や、取りこぼした遺骨をまとめ置いてある状況は古墓の発掘調査でよく確認される。簪や煙管、指輪など故人が使用したと思われる副葬品が出土することもあるが、宮城平田原古墓群の発掘調査で、それらは出土しなかった。



本遺跡内で最も古い厨子甕の破片
(大屋門中墓から出土)

「宮城平田原古墓群」はどのような遺跡か

今回の発掘調査では、大屋門中墓については1700年代に造られたと推測し、更に安次嶺門中墓は1630年頃まで遡れる可能性があることを明らかにした。豊見城地頭家譜資料「毛氏(護佐丸直系)家譜」にある「順治16(1659)年豊見城間切翠宮城地頭毛恩禮」の記載から、その時代には翠宮城村が存在していた(『宮城誌』p.39)という集落の発祥に係る説を、考古学の面からも補強できたといえる。ここで注意してほしいのが、墓の年代は門中の歴史とかならずしも一致しないことである。墓室形態は安次嶺門中墓が古いが、厨子甕は大屋門中墓に古いものがみられる。先ほどから述べている移設先と思われる安次嶺門中墓の範囲で採取した厨子甕破片に、大屋門中墓ほど古い破片はみられない。想像だが、安次嶺門中と同じく大屋門中が墓を作り直していた可能性や、大屋門中墓の「池」に納められた遺骨が元々はより古いタイプの厨子甕に納められていた可能性がある。

今回は古墓の発掘調査であって集落の発掘ではない。今後、集落範囲内で発掘調査を行うことができれば、集落の歴史をさらに詳細に明らかにできるだろう。かつての集落の範囲内で建築工事を予定される方は是非とも文化財課にご一報いただきたい。本稿の寄稿後に、市文化財課に先んじて県立埋蔵文化財センターにより発掘された「宮城平田原遺跡」の発掘調査報告書が刊行された。集落の辺縁部にあたる地点で、1600年代後半から17世紀代の中国産陶磁器が出土している。

参考文献

那覇市字宮城自治会2006『宮城誌』
仁王浩司2013「近世墓の形態～本島中南部における墓室構造の変遷について～」『琉球近世墓の考古学－発表報告編－』沖縄考古学会